

# 佐河田昌俊の連歌資料

渡 辺 憲 司

## まえがき

佐河田昌俊喜六（天正十六〜寛永二十年）は、江戸時代初期、所謂、寛永文化圏において、小堀遠州、松花堂昭乗、林羅山等と親密な交遊関係をもった人物として知られる。寛永文化圏の武家側の中心的な一人であった。昌俊は、地下の歌人の少なかつた江戸時代初期において、勅撰の「集外歌仙」にその名を残し、また江戸時代後期の歌人達からは、木下長嘯子、北村季吟、望月長孝等と比肩する評価を与えられていた。<sup>(注1)</sup>江戸時代初期の代表的武家歌人である。現代においても、「京都に暫く住んで風流文雅の会話を耳を傾けてみると、昌俊の名を一年のうちに一、二度位は必ず聞く」といった人物でもある。<sup>(注2)</sup>

しかし、文学史上においては、他の寛永文化圏の人物に比べて、あまり関心のはらわれなかつた人物であつたように思える。

その理由のひとつは、文学史上において検討を加えられるべき具体的な作品（入歌・連歌）が、ほとんど未紹介であつたためであると思われる。佐河田昌俊の全体像を初めて紹介された宗政五十緒氏の

論考においても、<sup>(注3)</sup>また早くより昌俊に多くの関心を寄せられた金蘭丈夫氏の論考においても、<sup>(注4)</sup>歌や連歌の今に残るものは少ないようであるとされてきた。

歌については、今迄に二百数首が存することを、井上宗雄先生、<sup>(注5)</sup>富田勝治氏等の御教示によつて知り、翻刻の機会等を得させていた。本稿は、先達の紹介された連歌資料に補足を加え、佐河田昌俊研究の基礎的作業を試みたものであるが、連歌の具体的な作品の紹介は別に機会を改め、連歌会の記録を通して交遊関係について考えようとしたものである。また、三十代前半までの佐河田昌俊の伝記研究を試みた拙稿<sup>(注6)</sup>をなし、三十代後半以降の昌俊の動向についてふれようとしたものでもある。

以下、列記した資料のほとんどは、「連歌の史的研究」（福井久蔵、昭和五年）を手がかりに確認したもので、新資料などと称すべきものではないが、今迄に佐河田昌俊の連歌資料として、その伝記研究等においてふれられたものは、管見の範囲では三種程であり、まゝまった形で提示することに、何等かの意味があるように思える。また、これを機に大方の御教示を御願ひし、年譜作成の折に補足した

いと考えている。

—

算用数字は整理番号、漢数字は句数、圈点筆者。

(1) 慶長二十年六月二十八日、日下部五郎八興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十一、宗好 九、玄仲 九、未云 八、忠利 七、昌侃 九、於松 八、圓政 八、玄俊 七、尚俊 七、玄的 七、寛佐 七、小珍 二、心也 一。

(2) 元和三年八月四日、夢想之百韻。(国立国会図書館蔵「連歌合集九・十八」)

御 一、於松 十、昌琢 十三、玄仲 十二、昌侃 十一、了侃 十、以省 八、寛佐 九、尚俊 七、玄陳 九、玄的 九、執筆 一。

(3) 元和七年十月二十四日、玄陳発句百韻。(天理図書館蔵「連歌集」)

玄陳 七、信的 六、昌琢 七、昌俊 六、慶順 二、昌侃 七、禪昌 二、行生 六、宣滋 七、紹由 二、玄的 七、重信 六、宗順 七、順息 六、貞重 六、道哲 二、政直 六、景治 一、豊一 六、住丹 一。

(4) 寛永四年四月二十五日、敬公御夢想倭漢。(天理図書館蔵)

御 一、尾張大納言 二、本光国師 十一、玄仲 十一、応昌 十、玄益 十、道春 十、元竹 九、昌俊 十、永喜 九、正意 八、聴意 八、玄高一。

(5) 寛永四年十一月二十五日、定勝公万句御連歌之内賦初何連歌。

(上杉家文書「大日本古文書、家わけ第十二」)

定勝、宗茂、紹之、外由、義成、家政、昌俊、昌純。

(6) 寛永四年十二月二十五日、金森出雲守興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、重頼 十、安元 九、応昌 十、俊賀 八、藤甫 九、昌俊 九、以省 九、昌隠 八、堯政 七、寿伯 七、心利 一。

(7) 寛永五年正月十四日、脇坂淡路守興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」、国立国会図書館蔵「連歌合集九・十九」)

昌琢 十三、安元 十、重頼 九、応昌 九、俊賀 八、重保 八、親直 七、昌俊 八、藤甫 七、昌隠 七、玄仲 十三、執筆 一。

(8) 寛永五年正月二十八日、浅草文珠院興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、応昌 十、安元 九、重保 八、外由 八、以省 九、昌俊 十、昌隠 九、元次 七、貞三 八、榮清 八、公宗 一。

(9) 寛永七年正月十日、蒔田権佐興行百韻。(京都大学国文研究室蔵「昌琢二千句」)

広定 一、定光 一、広則 一、定正 一、勝則 一、正吉 一、長広 一、広安 一、定長 一、次長 一、昌琢 十二、応昌 九、昌俊 十、昌程 九、以省 二、徳元 九、昌隠 十、吉清 十、重観 九、昌悦 九、執筆 一。

(10) 寛永七年正月十三日、小出大和守興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、吉英 九、応昌 十、昌程 十、重成 九、昌俊 九、貞三 九、能泉 八、榮清 八、重観 七、昌悦 七、丈公 一。

(11) 寛永七年正月二十一日、岡本宮内興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、義保 九、応昌 九、昌程 九、以省 八、重秀 七、保心 八、昌俊 八、外由 八、昌隠 七、泰次 六、元次 七、保定 一。

(12) 寛永七年正月二十四日、岡本伊兵衛興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、保心 八、義保 九、昌程 八、応昌 九、以省 八、外由 七、昌隠 九、昌俊 八、泰次 六、重好 七、昌悦 七、丈公 一。

(13) 寛永七年二月三日、脇坂淡路守興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、安元 十一、忠国 九、昌程 九、勝之 十、応昌 九、頼定 八、重成 七、昌俊 八、以省 八、徳元 七、良定 一。

(14) 寛永七年二月二十四日、知足院興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、榮僧 八、俊賀 九、応昌 十、昌程 九、義保 九、昌俊 九、以省 八、外由 九、昌隠 八、吉次 七、友平 一。  
寛永七年二月二十九日、佐久間大膳興行百韻。(京都大学付属

図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、勝之 十、俊賀 十、安元 九、応昌 十、玄有 七、昌程 九、乘秀 七、以省 八、昌俊 九、昌悦 七、良定 一。

(16) 寛永七年三月十七日、大覚院興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、乘秀 八、応昌 十、昌程 九、昌俊 九、外由 十、元次 八、宗持 八、昌隠 八、周元 七、以省 九、丈公 一。

(17) 寛永八年二月十八日、脇坂淡路守興行百韻。(国立国会図書館蔵「連歌合集九・二」)

昌琢 十三、一通 十、昌程 十一、安元 十一、重頼 九、勝之 九、久盛 三、重成 九、昌俊 九、昌悦 八、重好 七、丈公 一。

(18) 寛永八年二月二十日、小出大和守興行百韻。(国立国会図書館蔵「連歌合集九・二」)

昌琢 十三、吉英 九、重成 九、重頼 十、昌程 十、以省 八、昌俊 九、紹益 七、貞三 八、榮清 九、昌悦 八、丈公 一。

(19) 寛永十年二月九日、糸屋宇右衛門興行百韻。(京都大学付属図書館蔵「昌琢発句連歌」)

昌琢 十三、友直 七、玄仲 十二、公頼 八、昌悦 九、慶純 九、玄陳 八、紹由 八、了倪 八、玄的 八、昌俊 八、仙安 一、小弥 一。

(20) 寛永十年二月二十日、木屋庄九郎興行百韻。(国立国会図書館蔵「連歌合集九・二一」)

昌琢 十四、光保 八、長忠 四、昌程 十二、昌俊 十一、徳元 八、至玄 十、昌悦 八、春宣 九、保忠 八、則知七、大助 一。

(21) 寛永十年三月十日、沼津右兵衛興行百韻。(「連歌の史的研究」による。)

昌琢、俊長、昌程、昌俊、為重、至言、昌隠、重信、昌悦、保忠、光保。

(22) 寛永十年(月・日不明)、漢和連句。(天理図書館蔵「石鼎集下」)

道春、応昌、玄仲、大圭、永喜、正意、重門、昌俊、紹佑、吉真。(「連歌の史的研究」には年時未勘とされる。)

(23) 寛永十二年(月・日不明)、「連歌の史的研究」による。

昌琢、宗玄、正方、昌侃、玄陳、昭乘、玄的、昌俊、昌程、言当、宗因。

(24) 年時不明(寛永十五年以降カ)。(高橋箒庵旧蔵。金関丈夫氏が前掲書において紹介。)

宗甫、昭乘、言当、昌俊、宗玄。年時不明(寛永十五年以降カ)。(陽明文庫蔵「岡本半介宛、松花堂昭乗書簡」)

玄的、个庵、昌俊、昭乘。

(25) 寛永十七年元旦。(島原松平文庫蔵「連歌集書」)

玄尚、紹尚、紹其、宗甫、个庵、昌俊。

二

以上、管見の範囲で、昌俊(尚俊)の名が連歌資料に初めて見えるのは、慶長二十年からである。慶長二十年、昌俊は三十七歳である。昌俊は慶長十二年、二十九歳の頃、数年の牢人生活の後、駿府で、徳川家康に仕え御書院番頭をつとめていた永井直勝に出仕し、慶長十九年には、大坂冬の陣に参加し、九鬼長門守との抗戦に際しては勇名を馳せるなどした。慶長二十年の時点では、永井直勝のもとで駿府を中心に生活をしていったと思われる。

しかし、元和二年四月家康が没すると、直勝は秀忠のもとで江戸在勤を命ぜられる。昌俊もこれに従って江戸に移り住んだと思われる。昌俊は、寛永二年永井直勝が六十三歳で没すると、永井家を襲封した永井尚政に引き続いて仕えた。尚政は元和八年より寛永十年三月まで老中職をつとめ、ほとんど江戸を離れることがなかったようである。したがって、昌俊も元和初年頃より寛永十年頃まで、江戸を中心に生活していたと思われる。

永井尚政は寛永十年に老中を退くと、同年四月、淀城主となり京都周辺の治安にあたった。この時、昌俊はこれに従って京都周辺に移り住んだと思われる。そして、寛永十五年、五十五歳の時、老齢を理由に永井家を致仕し、京都郊外田辺新村の酬恩庵(俗に一休寺と称す)の傍に庵をかまえて、黙々庵と称して最晩年を送った。昌俊が没したのは、寛永二十年八月三日、六十五歳であった。

昌俊が、小堀遠州、松花堂昭乗、江月和尚、淀屋个庵等と親密な交遊関係を持ち、京における文化人達の間で中心的な人物となり、

前述したごとく、現代に至るまで風雅の道にその名をとどめたのは、最晩年の黙々庵時代の活躍によってである。本稿では、一応、最晩年に至るまでの連歌資料を列記したが、黙々庵時代、及び寛永文化圏における昌俊の位置については、茶会記録、書簡等の紹介とともに別稿を用意しているのので、江戸在任の頃の連歌資料を中心に説明を加えておくことにする。

※

江戸在任期の佐河田昌俊が、当時の連歌壇において高い評価を与えられていたことは、林羅山が昌俊の嗣子である俊甫の求めに応じて、寛永二十一年に記した「佐河田壺斎碑銘」(「林羅山文集、巻四十二」)の記事によって知ることが出来る。

或人、法橋昌琢ニ問テ曰ク、当時、能ク連歌ヲスル者誰ソヤ幾バク有ル。答ヘテ曰ク、鎮西ニ某甲有リ、坂東ニ昌俊有リ。

(原漢文、傍点筆者)

昌俊は、元和初年より寛永期に至る約二十年間、連歌壇における武家歌人として、坂東随一の者であるという評価を与えられていたのである。

昌俊に対して、以上のごとき賞讃を与えた里村昌琢(寛永十三年没、六十三歳)は、昌休を祖父、昌叱を父、紹巴の女を母として生まれ、早く慶長十三年法橋となり、元和三年、父の没後は、遺領百石を襲封して里村南家の頭主となり、寛永五年に御城連歌に勤仕して連歌壇に不動の地位を築いた人物である。当時の連歌師の最有力人物である。列記した連歌資料中、発句をつとめることのもっとも

佐河田昌俊の連歌資料

多かった人物である。

里村南家では、昌琢の弟昌侃(寛文五年没、六十四歳)、昌琢の子昌程(元禄元年没、七十七歳)等の名を見出すことが出来る。

(3)で発句をつとめている玄陳(寛文五年没、七十五歳)は、里村北家の頭主、紹巴の孫で玄仍の長男である。北家では、他に玄仍の弟玄伸(寛永十五年没、六十一歳)、玄仍の二男玄的(慶安三年没、五十八歳)、玄陳の長男玄俊(寛文四年没、五十歳)などの名を見出すことが出来る。

連歌資料のみで、職業的連歌師との関係を云々することは危険なことのように思えるが、昌俊の当時の連歌壇における役割が重いものであったことを再認識することは出来る。玄陳発句の(3)の連歌資料においては、昌俊が脇句をつとめ(第三をつとめた禪昌は、北野天満宮宮仕)、昌俊が亭主となった興行かと思われる。また、「本光国師日記」の寛永八年八月二十三日の条には、「昌琢八月二日之状来ル。持病差出相煩由之書中也。佐河田喜六より届ル」と記されている。本光国師、即ち以心崇伝(寛永十年没、六十五歳)が、当時の連歌壇にも多大の影響力を持っていたであろうことは、その日記に、昌琢及び玄陳、玄的の名のしばしばあがっていること等によっても知り得るが、日記には「喜六」の名もあがっており、また、昌俊は(4)の資料においても、崇伝と同座している。幕府の対文化政策の重鎮とも称すべき崇伝の周辺に、昌俊が昌琢等とともに出入りしていたことは、注目すべきことのように思える。

(1)(2)の資料において、昌俊の名が尚俊と記されているが、昌俊が養父木戸元斎編「師説撰哥和歌集」の写本(天理図書館蔵)の奥書

(慶長十八年)に「みるたひに袖の上にそなかれぬるふかきころの水くきのあと 尚俊」とあり、また、東京大学史料編纂所蔵「高文書」中にある佐河田昌俊の歌集の巻頭に「駿河に侍る比飛鳥井宰相雅庸へよみてまいらせける廿首の哥の中に春たつを 高階尚俊」とある。(雅庸の駿府下向は慶長十七年であり、この頃のことと思われる。高階は佐河田家の先祖の姓)昌俊は、元和の初め頃まで、尚俊とも称していたのである。

尚俊を昌俊とした理由は明らかでない。しばしばあることで、問題にすべきことではないかもしれないが、主君永井尚政の一字を避けたためか、或は、里村南家ゆかりの昌の字を冠したためかとも推察される。また、この時期、自らの名が世に表われ始めたことに對して何等かの意識が働いたためかとも思われる。西洞院時慶が、「時慶卿記」の元和七年七月十七日の条に、「早川田壺斎ト云仁ノ事ヲ聞、刀目聞又歌道等嗜ト」と記しているが、彼の名が當時の文化人の間で評判になりつつあったことを示すものである。

昌俊の名を當時の連歌資料にしばしば見ることが出来るのは、昌琢の評価や、「時慶卿記」や「本光国師日記」の記載を傍証し、その幅広い交遊と活躍をうらづけるものであるように思える。

幅広い連歌壇における活躍の中で、昌俊がもっとも多く参加しているのは、大名の興行した連歌である。(6)を興行し、(7)(8)にも参加している重頼は、飛騨高山で三万五白石を領した金森出雲守重頼(慶安三年没、五十七歳)である。祖父金森長近、父金森可重、兄金森宗和等、いずれも茶人として著名であり、金森家は当時において、もっとも風雅を好んだ一門である。(10)(11)を興行している小出大

和守吉英(寛文六年没、八十歳)は、当時、但馬出石で五万石を領していたが、吉英は沢庵和尚を庇護した大名として知られる。沢庵と昌俊の間にも交遊のあったことは、寛永九年夏の奥書を持つ「東海和歌集」に「佐川田歌よみてこしける返し」といった詞書のあることでも知り得る。猶、元和元年、大坂の役の際、小出吉英は和泉岸和田城を守っていたが、岸和田劣勢の折、加勢に駆けつけたのは、前記の金森重頼であり、以降二家の間には親密な交遊があったと言われる。

(9)を興行している広定は、備中国賀陽、窪屋等で一万石を領した蒔田左衛門佐広定(寛永十三年没、六十五歳)である。始め秀吉、秀頼に仕えたが、関ヶ原の戦いの後、高野山に蟄居し、後に家康、秀忠に仕えた。広定は甫庵とも称し、「配所残筆」には山鹿素行より論語講釈を受けた人物としてあがっている。好学の大名として、また秀忠の御伽衆の一人としても知られている。

秀忠の御伽衆としては、(10)を興行し、(11)にも参加している佐久間大膳亮勝之(寛永十一年没、六十七歳)がいる。勝之は始め北条氏に仕えたが、小田原没落後浦生氏郷に属し、関ヶ原の戦いの後、徳川氏に属し、信濃、近江で一万石を領した。勝之は慶長十九年穰多城を攻めているが、この時、永井直勝のもとにあった昌俊が、その攻略に戦功のあったことは「碑文」等によって知られる。勝之はその当時から昌俊の名を知っていたのであろう。

列記した資料中、注目すべき大名歌人は、脇坂淡路守安元(承応二年没、七十歳)である。安元は(7)(8)を興行し、(6)(8)(10)(11)で、昌俊と同座している。登場する回数も、もっとも多い。昌俊との関連を

少し述べておく。

安元は脇坂安治の二男として生まれ、兄安忠の早世により元和元年に襲封し、同三年信濃飯田に伊予国大洲より転封し、五万五千石を領した。佐久間勝之、蒔田広定と同様に秀忠の御伽衆の一人でもある。安元が文芸に対して大きな関心をはらった大名であることは、歌集「八雲愚草」、及び伊勢物語の注釈書である「在昔抄」などの筆者であることから知れる。また、正保元年四月から翌年六月までの常陸の下館在番中の日記「下館日記」には、「続古今集を見はて、続拾遺集をよみはじめる」「玉葉集しものまきを見るにゑどより人來たる」「ミじろぎせで続千載集をよむ」等といった記事が散見する。また近世初期の善本蒐集家としても知られ、「国史館日録」(延宝二年五月十二日の条など)などによってその蔵書が八雲軒本として流布していたことも知れる。安元の古典文芸に対する情熱は、他の多くの大名の文芸へのかかわりと異なり、たんなる教養や慰み以上のものを感じることが出来る。

安元の人物像を探り得るものとして、「藩翰譜」に次のごとき記述がある。

此の人当時武家第一の歌人なり、読める歌世に伝はる所多し。

寛永の頃、諸家の系図を召されしに、此の人の奉る所は祖父の代より記し初めて、其の初めに

北南それとも知らず此の糸のゆかりばかりの末の藤原

と書きて奉りしかば、將軍家にも殊に御感斜ならず、

「北南それとも知らず……」の歌は、「藤原安元 寛永十九年壬午七月朔日」の奥書を持つ、東京大学史料編纂所蔵「脇坂記」にも記

佐河田昌俊の連歌資料

されている。

中世以来の伝統的な歌字の中に育まれ、殊更にその家柄を重視していたと思われる近世初期の歌人達の中であって、家柄に拘泥せぬこの逸話は、執拗なまでの和歌への情熱とともに、近世初期の大名と文芸のかかわりを考える上で、いささかの問題を提起しているように思える。この事は、脇坂安元と佐河田昌俊の交遊を考える上でも重要な事のように思える。昌俊にとって、安元との交遊は、たんなる空間的の広がりを与えたのみならず、地下の歌人としての活躍に新しい意味を持たせたように思える。

安元の歌集「八雲愚草」は多くの詞書を持ち、哀傷、贈答、餞別の部からは、安元の交遊関係を見ることが出来る。その中には、飛鳥井雅庸、中院通村、林羅山、小堀遠州、沢庵和尚、金森重頼等、昌俊の交遊圏と重なる人物を見出すことが出来る。昌俊との交遊を示すものとして、上巻、哀傷の部に「佐川田のなにかしなき跡のあはれをふかくとひ給ふる」「昌俊いまうとの身まかりけるに読てつかハす」といった詞書があり、下巻、贈答の部には、

五十首の韻字の哥よみける時昌俊かもとへやりてみせければ  
よみておこせ侍る哥

言の葉の花のひかりそうへもなき月のかつらを折心地して

とある。安元と昌俊の關係が親密なものであったことを示す連歌資料を、側面から証明するものでもある。

昌俊と安元が同座している連歌資料で、初見のものは、(6)の寛永四年のものである。「林羅山詩集 卷之十四」の「和脇坂淡州大守元且俊歌四十七首」の注に「今茲之冬淡州卒去年七十少三先生一歳

相識三十年、交際最厚」とあり、安元の没年から逆算すれば、三十年以前とは寛永の初年頃から言うのであろう。昌俊と羅山の関係については、既に宗政氏等の前掲書にふれられているが、寛永六年には、羅山の長子叔勝の夭死を悼む歌三首（「林羅山詩集、卷四十一」）が、昌俊よりおくられ、また羅山の第四子守勝の「誦耕詩集、卷七」には昌俊の子俊甫のことが記されている。羅山と昌俊の関係も、儀礼的交遊以上のものであったと推察される。

寛永初年、昌俊の四十代後半、脇坂安元、林羅山等との交遊は、より親密なものになっていったと思われる。因に、昌俊の交遊圏の軸となった人物達、小堀遠州、林羅山、脇坂安元、松花堂昭乗等の年齢は五歳と離れていない。寛永三、四年頃、彼等は四十代後半をむかえていた。細川幽斎（慶長十五年没、七十七歳）等を中心とした中世的残像の色濃い時代から、新しい文化圏を形成する力を得た彼等の始動の時期と、昌俊の連歌壇における活躍の始まる時期が、期を同じくしていることを指摘しておく。

列記した資料中、(1)を興行し、(4)にも同座している義保は、下野国芳賀郡小貫で三千八百六十石を与えられた幕臣岡本義保、(2)の保心はその弟である。(7)の久盛は、豊後国岡城主で七万石を領した中川内膳正久盛（承応二年没、六十歳）である。昌俊の名は、当時の連歌好士の大名間に相当に知られる存在であった。

(4)(6)(8)(11)(12)(13)(14)(15)(16)で同座している応昌（正保二年没）は、高野山文珠院の僧、一名応周、字は保乘、興山寺の第三世である。

応昌は、寛永十六年文珠院堂上権頂傍席をめぐる、行人方と学侶方との対立事件において著名である。応昌が当時の連歌壇においても

有力な人物であったことは、前記資料に数多く見られることによっても知り得るが、寛永十五年正月二十日の徳川家光出座の恒例の具足祝の連歌において、第三をつとめていること（（附）玄仲の発句、家光の脇句）から、また「有米麴記」などに名前のあることなどからも知り得る。また林羅山との交遊は、「林羅山詩集」卷四十の「悼惜文珠院應昌」「應昌七年忌」などによってうかがうことが出来る。「隔賞記」等に、応昌と諸大名との交流のあることなどに指摘がある。（附）(8)(13)(14)の徳元は、貞徳門五俳哲の一人として知られる斎藤徳元（正保四年没、八十四歳）である。徳元と応昌との交流についても既に指摘があるのでここでは省略する。その他、(4)(12)に同座している林羅山の弟永喜（信澄、寛永十五年没、五十四歳）、羅山、脇坂安元らと親密であった尾張藩儒堀正意（杏庵、寛永十九年没、五十八歳）などの名があるが、いずれも昌俊との交流を、その全集等に見出すことは出来なかった。傍証され得る資料を見出した段階で追考したいと考えている。

連歌資料中、昌俊の伝記資料として注目すべきものは、(5)の上杉定勝公万句興行連歌である。宗茂とあるのは、筑前柳河で十三万石を領し、秀忠の御伽衆でもあった立花飛騨守宗茂（寛永十九年没、七十四歳）であろう。上杉定勝（正保二年没、四十二歳）は、出羽米沢で十五万石を領している。定勝の父景勝（元和九年没、六十九歳）は、昌俊並びに昌俊の養父木戸玄斎にとっては、旧主君であり、上杉家は、昌俊の前半生にとってもっとも重要なかわりをもっている。養父木戸玄斎は、上杉家一門における重臣として、鶴岡の大宝寺城主となり、また朝鮮の役にも参加した武将である。また



上杉家文芸の中心的存在として直江兼統らと共に知られている武家歌人である。昌俊はこの元斎のもとで養育され、和歌を教えられたのである。昌俊は元斎の後継者として上杉家文芸の中心になり得ることを期待されて養育されたのである。

前記拙稿において、昌俊が上杉家を離れ、牢人の身となった時期を、慶長六年八月以降のこととし、その時期が上杉景勝が徳川方との徹底抗戦を避けて会津より米沢への移封に応じた頃と重なりあうものであらうと推論した。昌俊が二十三歳頃のことである。仮に、関ヶ原の戦い等もなく、上杉家がその安泰を保って、豊臣政権下に重きをなしていたならば、昌俊もまた上杉家一門で文芸に名のある武將として活躍していたはずである。しかし、牢人後、二十数年、昌俊の人生は大きく変化し、今、四十代の昌俊は、かつての宿敵、徳川家一門永井直勝の家臣として頭角をあらわしたのである。

昌俊が、永井家の家臣として、旧主家上杉定勝主権の連歌会に列したことの事実は、昌俊の寛永初年の置かれた状況を象徴的に示していると言えそうである。上杉定勝と昌俊の年齢差は二十五歳。昌俊が越後在任の頃、定勝と面識のあらうはずはない。しかし、旧主家を眼前に一座する昌俊の胸中に複雑な思いがあったとするのは、あながち筆者の思いすこしではないようにも思える。少なくとも、関ヶ原戦後二十年、昌俊の連歌壇における活躍は、新しい世代における新しい状況の変化を示していると言えるであろう。

以上、佐河田昌俊の関係した連歌資料を列記し、いささか恣意的な感想を述べた。昌俊の前半生が中世末の武家歌壇に立脚していることを確認した前記拙稿に対して、本稿では、昌俊の連歌とのかか

## 佐河田昌俊の連歌資料

わりを述べながら、所謂近世的な新しい動向についてもふれたつもりである。重層的な寛永文化の解明への手がかりになり得ればとも思う。

別に機会を改めて、今回ふれえなかった、小堀遠州、松花堂昭乗、淀屋个庵等との関係について述べ、昌俊の最晩年、寛永文化の中枢的位置にあつて活躍した状況について考えることにする。

(注1) 昌俊の近世における評価については拙稿「佐河田昌俊の歌一首管見」(梅光女学院大学、日本文学研究第十五号)、昭和五十四年)においてふれた。

(注2) 金関丈夫「心にかかる峯の白雲―佐川田昌俊伝」(「お月さまいくつ」、昭和五十五年、法政大学出版社)参照。

(注3) 「佐河田昌俊―近世初期の一武家歌人の生涯」(論集、日本文学・日本語4 近世、昭和五十三年、角川書店)

(注4) (注2)の他に、「茶杓都鳥」(茶道雑誌)、昭和二十五年五月、「雪さらし」(淡交)昭和四十年七月)

(注5) 「池田富蔵博士古稀記念論集、和歌文学とその周辺」(昭和五十七年刊予定、桜楓社)に「高階尚俊歌集―解説と翻刻―」として紹介。

(注6) 拙稿「佐河田昌俊の前半生について」(近世文芸)、昭和五十四年九月)

(注7) 「八雲愚草」並びに「下館日記」は、金井寅之助氏によって、松蔭女子学院国文学研究室編「文林」に紹介、翻刻がある。

(注8) 加藤定彦「古俳諧資料」「平井卜養狂歌集其他」の解題と翻刻」(『近世文芸資料と考証』第九号)の解説等参照。

(注9) 「大猷院殿御夷紀」巻十九、参照。

(注10) 田中善信「『隔賞記』連俳資料(一)」(『文芸と批評』第三巻第四号)参照。

(注11) 御伽衆については「大名と御伽衆」(桑田忠親著、有精堂)を参照。

(追記) 本稿を成すにあたり、加藤定彦氏に多くの御教示を受けました。付記して御礼申し上げます。